研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-169		21-417	手稲渓仁会病院　白坂知彦 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター　松下幸生

題名（原題／訳）

The World Health Organization Risk Drinking Levels Measure of Alcohol Consumption: Prevalence and Health Correlates in Nationally Representative Surveys of U.S. Adults, 2001-2002 and 2012-2013

世界保健機関（WHO）のリスク飲酒レベルによるアルコール消費の測定法。米国成人の全国代表的な調査における有病率と健康状態との関連について 2001-2002 年と 2012-2013 年での比較検討

執筆者

Shmulewitz D, Aharonovich E, Witkiewitz K, Anton RF, Kranzler HR, Scodes J, Mann KF, Wall MM, Hasin D; Alcohol Clinical Trials Initiative (ACTIVE Group)

掲載誌

Am J Psychiatry. 2021 Jun;178(6):548-559. doi: 10.1176/appi.ajp.2020.20050610. Epub 2021 Jan 21.

キーワード	PMID
アルコール、物質関連および依存性の障害、治療、WHO リスク飲酒レベル	33472388

要　旨

目的： 世界保健機関（WHO）リスク飲酒レベル（非常に高い、高い、中程度、低い）の有病率の経年変化や健康状態との関連について、全体および性別でほとんど知られていない。著者らは、全米を代表する 2 つの調査データを用いて、経時的な変化が性別によって異なるかどうか、また、各調査においてアルコールに関連する健康状態が WHO リスク飲酒レベルと関連しているかどうか、さらに、これらの関連性が性別によって異なるかどうかを検討した。

方法： 2001-2002 年の National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions（NESARC、N=26,655）および 2012-2013 年の NESARCIII（N=25,659）の現在の飲酒者に関するデータをロジスティック回帰を用いて分析した。調査間の有病率の差は、全体および性別の飲酒レベルごとに推定された。また、各調査において、アルコール使用障害（AUD）、薬物使用障害、機能障害、肝疾患、うつ病・不安障害について、WHO リスク飲酒レベル別の有病率の差を推定した。

結果： 2012-2013 年の調査では、中リスク、高リスク、超高リスクの飲酒の有病率はそれぞれ 5.9%、3.2%、3.5%であり、2001-2002 年の調査（それぞれ 1.0%、0.6%、0.9%）から有意に増加した。超高リスク飲酒者（0.5%）の増加は、女性（1.4%）の増加よりも小さかった。両調査とも、低リスクと比較して、健康状態は非常に高リスク（有病率の差の範囲、2.2%-57.8%）、高リスク（2.6%-41.3%）、中リスク（0.6%-29.8%）の飲酒と有意な関連があった。男女別では、男性では AUD、女性では機能障害、うつ病性障害、不安障害に強い影響があった以外は、ほぼ同様の相関がみられた。

結論： 米国の成人における潜在的に問題のある飲酒レベルの増加は、より良い予防と治療戦略の必要性を強調している。本研究の結果は、WHO のリスク飲酒レベルの妥当性を支持するものであり、禁酒をしない飲酒量削減の治療目標としての臨床的有用性を示している。このような目標は、より多くの人々を治療に参加させ、危険な飲酒がもたらす個人的・社会的影響を減少させることで公衆衛生を向上させることができる。